概評の后、普く衆諸の縱覽に供し、午前九時より午後三時に至るまで數百名を算せり。

式後、別室に於て講師の慰勞茶話會を開き、數番の餘興及會員の隱藝等あり、殊に當時市内に於て興行中の新俳優義正團員の劍舞の如き、世界の動物園の如きは最も喝采を拍したり。午後六時よりは、有志會合して、市下城山館樓上に丸山、河合兩講師の慰勞會を開き、午後十時歡を盡して退散せり。

本會主催の夏季講習會は右の如くにして全く終りを告げ、豫期以上の成績をあぐることを得たるは、實に本會の光榮とするところなり、これ畢竟、丸山河合兩氏の熱誠以て本會のためにつくされたる賜ならずんばあらず、特に丸山氏が、會期中病を冒して、一日約十時間以上指導の勞をとられ、河合氏が家庭の去りがたき事故を抛ちて本會に臨席せられたるが如き、又本部研究生榎本君が自己の研究のために費さんとする貴重なる夏季休暇を捨て、丸山氏を援けて會員の指導に盡されしが如きは、本會の最も感謝するところなり。

（支部委員）

出雲崎講習會の記

△本年五月初旬、出雲崎尋常高等小學校々長長谷川氏より、水彩畫夏期講習の講師として來遊を促して來た、本年は日本水彩畫會の講習を鎌倉に於て開く事になつてゐるので、謝絶しやうと思つたが、長谷川氏の斯道に熱心なるは、其依頼狀の字句にも現はれてゐるので、遂に動かされて、八月下旬一週間でよくば參上しやうといふ答を出した、こんな譯で、いよ〳〵八月二十二日から、越後出雲崎に於て水彩畫の講習會を開く事になつた。

△私は、八月十五日鎌倉から歸つて、九月號の『みづゑ』發行の準備をすませ、二十一日の朝出發、同夜柏崎に一泊、翌日午前出雲崎に着いた。會場は町端れの高臺にある學校で、日本海を眼下にして眺望がよい、長谷川氏の盡力で凡ての準備は整頓してゐた。

△出雲崎は、北越海岸に在つて可なりの町であるが、如何にも交通が不便で、鐵道線路を距ること何處へも六七里以上、それも砂濵又は峠を扣へて、人力車も二人でなくては輓けぬ處もある、越後は國が廣いが、かゝる不便の地であるから、會員は澤山はあまいと思つてゐた。

△然るに。豫想外にも申込は四十餘名に達してゐた、會員は、小學教員、師範及中學生等が重で、無論縣下の人々であるが、他縣としては、岐阜から二人、群馬から一人、秋田から一人來てゐる、そのうち差支欠席の人もあつて、實際席に列したのは左の諸氏であつた。

小栗富三郎　宇野泰吉　櫛淵雄須賀　品田七太郎　道川謙次　永越信次　內藤鐵吉　細川喜一　八田倭雄　丸山德三郎　岡村專一郎　樋口健次　松永龍三　安達宗次　庭山丑太郎　塚田與司　伊比見作　横山安明　鷲頭政一　青柳清次　小林正平　秋山順一　河野保藏　岡村順次　小松文吉　渡邊

啓次　遠藤平八郎　鷲頭新策　高橋俊三　片桐眞一　山岸泰之助　高橋浦次郎　安達福次　渡邊キク　齋藤ケイ　永原ヒデ　長谷川善作　阿部金治　永瀧文一郎　渡邊喜衞治

以上

△彌よ二十二日午前八時から授業を始めた、鎌倉と同じく午前一時間講話、三時間靜物寫生、午後は三時より日沒迄戸外寫生をやらした、又、夜の講話も試みた、會員一人の遲刻なく、最終迄欠席者なかりしは、其熱心の度を推するに難くはない。

△靜物寫生の材料は、書物に酸漿、南瓜、喬竹桃、ビール壜、三脚にスケツチブツク、コツプに梨等で、背景の布は多く白を用ひ、まゝ海老茶又は鼠の布を用ひた。

△戸外は、諏訪神社境内、蛇崩海岸、三角堂、町裏海岸にて親船等を寫させた。

△會員の多くは、初めて規則立つた寫生をするので、第一日は甚だ成績が惡かつたが、翌日よりは著しく進歩して、往々優秀の作を成した人もある。たゞ一般に、用具不完全なるため、其技の見るべきものあるに拘はらず、其結果の良好ならざりし人のあつたのは惜しむべきである。

△かくて、一週間は夢の間に過ぎた。幸ひに天氣續きであつたし、また絶えず涼風が吹いてゐたので、暑氣に苦しむことなく、二十八日午前、批評を爲し、同時茶話會を開いて、正午目出度散會したのである。この講習に於て、私は鎌倉以來の疲勞のため、充分の力を盡すことが出來なかつたのは、遺憾に思ふ處で、この點は會員諸君に御詫を申上げ、同時に、長谷川氏が、卒先して熱心盡力せられし御厚意を謝し、尙出雲崎町有志が、此講習會に同情をよせられ、多大の便宜を與へられしことを爰に深く御禮申上る。

（汀　鷗）

蟬時雨（鎌倉）

■鎌倉はお初にお目にかゝつたが失望もしたり滿足もしたり、失望はモットよい處と思つてゐたから、滿足は講習の面白かつた事■白狀すると僕はこれでも國では御自慢の方で、內心得意でゐたが、他の諸君の繪を見て少々參つた、其上講話をきいて見ると、水彩畫も中々むづかしいものといふことが知れて少なからず鼻柱を折つた■由井ケ濱の寫生、あまり早く起きたので再寢をしたらモー皆んなが出掛る處で驚いた■この朝の腹の減つたこと非常滅法、時間はまだ八時だつたが腹だけは三四時間も先走してゐた■ヘト〳〵になつて濱から宿へ歸つたが二十町もあるので更に大凹み■首ばかり前へ出て腹は脊に引着いて仕舞つた、横から見たらさぞ妙だらう■日はぢり〳〵照りつける、先生の脚は馬鹿に早い　汗はタク〳〵一生涯を通じての大苦しみだ■まさか■れむい〳〵この頃の眠さは曾て覺えがない■あまり夜更しをするからよ■不圖眼をさますと皆起きてゐる、寢てゐるのは二三人だ、向ふの二階に先生が起つてこつちを見てゐる、極まりの惡い事絶頂だ■誰れだか一寸顏を出したが直ぐ夜具を冠つて、仕舞つて、其儘障子の蔭へ逃込んだ人も